

商店街空き店舗活用モデル事例集

CASE06 新大門商店街

CASE07 松應寺横丁

CASE08 犬山本町商店街

CASE09 笠寺観音商店街

CASE10 蒲郡商店街

商店街は、商業機能の提供や地域コミュニティの担い手として、地域の持続的発展に欠くことができない重要な存在です。しかしながら昨今、商店街を取巻く環境は厳しく、その中でも店主の高齢化や後継者不足による空き店舗の増加は、商店街の活力や魅力を低下させるだけでなく、地域経済やまちづくりにも影響を与える深刻な課題になっています。

そこで、愛知県では今年度、空き店舗を活用して商店街を活性化するモデル事業を発掘・調査し、実際に活性化した5つの商店街を取り上げ、成功までのプロセスや取組みを集録したタブロイド紙を、全5回にわたって発行しました。

この度、タブロイド紙版をまとめた「商店街空き店舗活用モデル事例集」を作成しました。空き店舗問題に取組む商店街の関係者にはもちろん、これから出店を目指す方にも手に取っていただきたい内容です。是非、御覧ください。

愛知県経済産業局中小企業部商業流通課

目 次

- 01-06 新大門商店街(名古屋市中村区)
- 消えゆく景色の中で、見つけた答え。
 目指すのは、商いをする人にも、住まう人にも居心地の良いまちへ。-
- 07-12 松應寺横丁(岡崎市)
- まちも、暮らしも、もっと豊かに。地域の人とともに考える、まちづくり。-
- 13-18 犬山下本町商店街(犬山市)
- 伝統をつなぎ、人と人をつなぎ、まちと人をつなぐ。-
- 19-24 笠寺観音商店街(名古屋市中南区)
- まちづくりの可能性を広げ人と人のつながりを生む「シェアする」という考え。-
- 25-30 蒲郡商店街(蒲郡市)
- 人と暮らしに寄り添い、走り続けた先人たち。その歴史と想いが、いま次の世代へ。-
- 31 「愛ある5つの商店街に出会って」 末永三樹



愛知県 商店街空き店舗活用モデル事例集
CASE06
名古屋市 新大門商店街

01 | 02





消えゆく景色の中で、見つけた答え。
目指すのは、商いをする人にも、
住まう人にも居心地の良いまちへ。

新大門商店街 しんおおもんしょうてんがい

JR名古屋駅西口から徒歩約15分。かつて中村遊郭が存在し、その跡地の約500m四方が新大門商店街の区域となっています。平成初期頃まではにぎわいを見せましたが、2000年代に入ると勢いは一気に衰え、200店舗ほどあった商店街振興組合の加盟店は40店舗ほどに。時代を彩った歴史的な遊郭建築物もその多くがマンションへと姿を変えました。まちの景色が移り変わる中でも、大切にしてきた人と人の絆。新旧一体となって商店街再生に取り組んだ成果が、実を結ぼうとしています。





1923 中村遊郭建設

大須にあった遊郭(旭郭)を移転するため、元々田畑だった場所に中村遊郭が建設された。大門のまちは中村遊郭建設時につくられ、昭和10年頃中村遊郭の最盛期を迎えるが、戦後商売は下降の一途をたどっていった。



2023年に中村遊郭完成から100周年を迎えた。当時の遊郭建築物は近年取り壊されなくなってしまった。左:料理旅館大観荘、中:松岡、右:稲本(写真提供:新大門商店街振興組合)

古い建物がなくなるのはさみしいが、まちは新陳代謝して発展していくもの

1945頃 新大門商店街振興組合発足

戦後、発展会が集まって「新大門商店街振興組合」が発足。

最盛期には200店舗以上が加盟していたが現在は約40店舗となった

1974 「大門夏祭り」毎年開催

大門の夏の風物詩である納涼夏祭りが、新大門商店街振興組合主催で始まった。

1999 「エコ商店街」活動

商店街の活動が活発で、リサイクルステーションの運営やエココインの配布など、様々な活動を行っていた。

2011年東日本大震災後、加納さんがきもの美濃幸を継ぐために新大門に帰る。この地に根を張ると思ったときに覚悟が決まった

ターニングポイント
2015 OMON FES

2014年で終わった「大門夏祭り」を引き継ぎ、大門まちづくり友の会が「OMON FES」を開催。



若い者が集まって活動することに反感を抱く古参ともコミュニケーションを取り人間関係をつくることで、新しい活動が受け入れられていった(写真提供:新大門商店街振興組合)

ターニングポイント
2020 ナゴヤ商店街オープン参加

DIY・リノベーションを行う会社「soiro living」が、アップサイクル&DIYショップ「soiro building」をオープン

波及効果 店舗オープン



soiro building (2021) みんなの駄菓子屋(仮)(2021) / 大門横丁にあるよ

2021 太閤秀吉功路



豊臣秀吉や加藤清正の生誕地として、武将にゆかりのある地名や史跡、歴史的・文化的な資源が点在する中村区。名古屋駅から中村公園までのルートを「太閤秀吉功路人生大出世夢街道」と命名しモニュメントを設置。

取組成果
2022 「Teapick」オープン



ナゴヤ商店街オープンにより、紅茶専門店「Teapick」が開業。

波及効果 イベント実施
大門軒先マルシェ



地域の祭り「OMON FES」と同時開催。翌年は中村区と共催する交流事業として単独開催。

商店街振興組合、大門まちづくり友の会に続いて、新しく立ち上がったメンバーで開催。商店街が歩行者天国になった。それぞれが担う多様な活動があるのが大門らしさ!(写真提供:新大門商店街振興組合)

閉店する店舗が3店舗、新規開業が0だったのが、閉店3店舗は変わらずなくても、開店が1、2店舗と衰退がゆるやかになってきた

今後の課題

- ・ 新店舗にまちの起爆剤を求めすぎず。全体で底上げを目指す
- ・ イベントは人が集まるが日常的に商店街に来てもらえるよう商店街を知ってもらいたい
- ・ 活動の手を上げすぎると負担になるので仲間を増やしていきたい

地域に住む多様な人たちにとって、住みやすいまちにしていきたい。

商店街としての安定期とは新陳代謝していない停滞期でもあった



中村遊郭

1923年4月に開業した日本最大級の遊郭。東京の吉原を模した造りが特徴的で、外周を幅一間の堀で囲み、四隅の道を斜めにすることで、外部から中の様子をのぞくことができないようにしていました。この堀の跡地は道路となり、町境として形を残しています。一方で、中村遊廓のシンボルともいえた歴史的な建築物は徐々に取り壊され、跡地にはマンションや病院、スーパーマーケットなどが建設されています。

「大門」は中村遊廓建設時につくられたまちで、中村遊廓の繁栄とともに発展したものの昭和中期以降は下降の一途に。まちの賑わいを取り戻そうと、新大門商店街をはじめ、街ぐるみで活性化への取り組みが続けられています。



名古屋駅に近いこともあって近年マンション建設が進み新住人が増えている。外国人も多く、多種多様な人が住む「多様性のまち」

多様性と可能性のあるまち、新大門商店街

>> 加納さん

大門は1923年に中村遊廓が誕生したのを機にまちが開かれていきました。商店街は戦後に発展していき、新大門商店街としての歴史は80年弱くらいになりますね。もちろんもっと前からあるお店もあって、「きもの美濃幸」もその一つです。

ただ、僕自身は実は大門育ちではないんです。「きもの美濃幸」は母方の実家で、学生時代に住んだのは4年くらい。それから進学や就職でずっと離れていて、2011年に跡継ぎとして大門に戻ってきたので、トータルで15年ほど大門で暮らしています。

商店街としては昭和中期から平成に入るくらいまではもっとにぎわいがあり、商店街振興組合には200店くらい加盟していたけれど、今は40店くらいかな。他の商店街も似たようなところが多いと思うけど、大型ショッピングモールが増えたり、生活様式が変化したりして2000年代を底に一気に落ち込みましたね。今はV字回復とは言えないけれど、松本くんのようにまちづくりに関わる人も増えてきて、少しずつ下げ幅がゆるやかになっている感じです。

大門というまちは花街としての歴史もあり、かつては遊廓建築もたくさん残っていましたが、そうした「昭和レトロ」な風景を目当てに外から来る人もいたけれど、今はほとんど取り壊されてあまり残っていません。ある人に言われたんですが「まちは新陳代謝するもの」なんです。

大門にあった貴重な建築物や風景が失われるのは惜しいとも思いますが、循環することがまちの発展にも繋がっていくはずですよ。なくなるものに目を向けても仕方がないので、自分たちが何をしていくかが大事だと思います。

あと、もう少し広いエリアで言うと、大門は名古屋駅から西に1.5kmほどの場所にありますが、駅西のエリアは昔から外国籍の人も住んでいて、多様性もある。子どもたちを見ていてもたくましさを感じますね。

>> 松本さん

僕が新大門商店街に来たのは、名古屋市の商店街商業機能再生モデル事業「ナゴヤ商店街オープン」がきっかけです。ものづくりの拠点とコミュニティを作りたいと考えていたときにナゴノダナバンクの藤田さんに紹介してもらって、ハードとしての面白さや昭和の雰囲気が残っているインパクトを感じました。名駅から近いという立地のポテンシャルもありますね。

最初は別のエリアも検討していたんですが、既に成熟しきっている場所よりも、これから盛り上がる場所で核になることに可能性を感じて新大門商店街にDIY・リノベーションなどを行う「soiro living」を開くことにしました。コミュニティ作りにおいては、1から始めるのではなくて商店街のようにすでに人の繋がりができている場所でスタートすることにも可能性を感じました。



ハレの日だけじゃない
日常の大門も盛り上げたい

松本啓太さん
soiro living(ソイロリビング)店主



大門は人情味のある
地域の関係性が濃いまち

加納崇志さん
きもの美濃幸店主で商店街理事長

一朝一夕では生まれない、関係性を築くことの大切さ

>>加納さん

僕たちは「大門まちづくり友会の会」で「OMON FES」という地域の祭りをやっていたんだけど、一部の人からは「勝手に新しいことをやっている」と思われてしまうこともあったし、最初のうちは意見がぶつかりあったこともありました。でも、口だけではダメで、実際に自分がやってみてわかることもあると思っています。僕自身も母から引き継いで商店街組合の理事としての活動もするようになりました。

実際に動いてみると、元からいる人たちが言っていることが理解できるようになるんです。だから、自分でやってみることは大切ですよ。

あとは、日頃から関係性を築いていくことで、何かを始めるときにも「あの人が言うならいいよ」となって、すんなり通ることも多い。それくらい人間関係は大切です。合意形成が取れていると思っていたけれど、実際は一部の主体的な人以外の意見が反映されていなかった、なんてこともありますから。結局、人間関係ができていないからお互いを良く思えないんですよね。

実際はそれぞれの組織で100%の融和を実現するのは難しいと思うけど、完全に融合しなくても互いに制限せずにやればいいと思います。全てを一緒にやるのが難しくても、お互いの活動を知って協力できればいいですよ。

地域の人を使いやすく活気のある商店街へ。新大門商店街が目指す道

>>松本さん

この辺りは古くなった建物が取り壊しになり、どんどん新しいマンションが増えてきています。住民は増えてはいるはずだけど、新大門商店街のことを知らない人も多いのではないかと思います。マンションに住んで朝早くから夜遅くまで仕事に行っている人は、商店街のお店がオープンしている時間帯にはなかなか立ち寄れないですよ。実際にこの辺りに数年間住んでいて、地域のスーパーにしか行ったことがないという人もいました。そういった課題も踏まえて、地域の方にももっと新大門商店街に足を運んでもらえるようにしたいというのはあります。少しずつではありますが、大門軒先マルシェや大門びよりなどのイベントをきっかけに「近くで何かやっているから行ってみようか」ということで地元の方が来てくれているという体感があります。

大門の良さは人と人の距離感。商いをする人にも、住民にとっても心地よい場所であればと思います。歩くだけで声をかけられる文化が残っているので、ウェットな関係が心地よいと感じる人や、大門でこだわって何かしたい!という人と出会えたらうれしいですね。

とはいえ、新店ができることだけに商店街として期待しすぎるのも荷が重いですし、やはり今あるお店全体を底上げしていくことが大事なかと考えています。人の繋がりでどういかなることも多いので、今後も活動を通じて地域の関係性を築いていければとも思っています。

>>加納さん

僕が目指したいと思うのは地域に住んでいる人にとって便利な商店街ですね。使い勝手が良い商店街には活

>>松本さん

僕自身は、実はまちづくりをするつもりはもともとなかったんです。でも、加納さんとお話していく中で、のめりこんでまちのことを考えるようになっていきましたね。ものづくりの考え方をまちづくりにも当てはめてスライドしている部分もあります。

この3年間で、商店街の店内に出店するスタイルの「大門軒先マルシェ」や、日常の大門の魅力を発信する「大門びより」などを開催する実行委員会のメンバーとしても活動してきました。去年(2023年)は大門100周年記念の花魁道中の開催のために、地域のスーパーの駐車場を借りたり、行政と連携して道路を封鎖したりと、活動の幅が広がりがつありますね。

よく「なんでそこまでやるの?」って聞かれるけど、楽しんでやっているから身は削っていても無理はしていないんです。まちづくりも「soiro living」の事業のひとつだと思ってやっている部分もあって。活動を続けていくことで商店街やまちづくりに関する仕事にも繋がって、後でリターンが出ることもあります。

それに大門でまちづくりに関わるようになって、ちょっと商店街を歩いただけでもいろいろな方に声をかけてもらえるようにもなりました。自然発生的に挨拶があるのは良いまちだなと感じています。

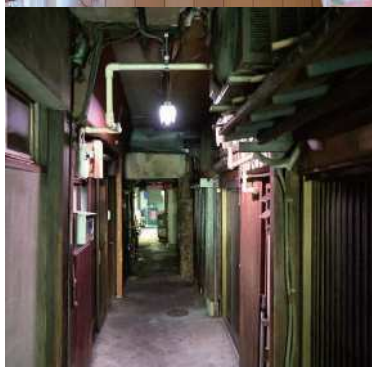
気が戻らと思うので、まずは商店街があることを知ってもらって、お店に来てもらえたら。

「良いまち」の定義は人によってそれぞれ違うと思います。大門はいろんな人に声をかけられる人情味のあるまちなので、それが合う人も合わない人もいます。ただ、これまでのいろいろなお店を見てきて、新しいお店や場所を続けていくには、やはり地域や商店街と関わりを持つとしないと難しいんじゃないかとも思います。商店街振興組合としてはもっとオープンに門戸を開いていきたいですね。

自分自身は脱サラをして跡継ぎになるぞ!ということで覚悟をもって大門にやってきたわけですが、今となってはサラリーマンでも、ここでお店や商店街に関わって生きていくのもどちらも大変なのは変わらないかな。でも、自分が根を下ろす場所をより良くしていきたいという気持ちは強いです。まち全体がひとつの会社・組織のような感覚があって、自分が所属する場所を良くしていきたいという思いもありますね。

まだまだ商店街全体として全盛期のように活気があるわけではありませんが、まちづくりに積極的に関わっているメンバーも10人ほどいます。みんな大門でお店をやっていたり、お店をもっていなくても中村区にゆかりのある人たちばかりで、コンサルタントのような外部のプレーンはいません。商店街振興組合以外のチームもそれぞれ主体的に動いているので、自分も前からいた地域の人にしてもらったように、これからは新しい歯車になって頑張ってくれる人のために動けるようになったらと思いますね。





SHIN OMOMI SHOTENGA



愛知県 商店街空き店舗活用モデル事例集
CASE07
岡崎市 松應寺横丁

07 | 08





まちも、暮らしも、もっと豊かに。
地域の人とともに考える、まちづくり。

松應寺横丁 しょうおうじよこちょう

岡崎市松本町、家康公ゆかりのお寺に開かれた松應寺横丁。再生への道は2011年、「松應寺横丁プロジェクト」の発足から始まりました。地域の人とともに課題を発見し、イベントの実施や空き家マッチングを構想。2013年に「あいちトリエンナーレ」の会場となったことが後押しし、今では新しい店舗が増え、貸せる物件がほとんどないほどになりました。さらに、松本町包括ケア会議や買い物支援など地域主体のまちづくりが続けられ、近年では、「お年寄りにやさしいまち」としても注目を集めています。



1560 松應寺建立

江戸時代は門前町として栄えた

永禄3(1560)年家康公は桶狭間の合戦後、岡崎城主となり、非業の死を遂げた父の菩提のため、月光庵の地に寺を建立。家康公は手植えの松が緑深く伸長したことを喜び、松應寺と名付けた。



左:松應寺本堂、右:松應寺にしかない刻銀杏紋、徳川家の家紋「三つ葉葵」の原型になったと考えられている

家康公の父君を供養する寺として格が高く、一般の人がお参りに来られるお寺ではなかった。明治維新の際に規模を縮小された

家康公お手植えの松は空襲でも被災を逃れたが、1991年マツクイムシの被害で枯れてしまい、2010年に2代目が植えられた

1945 岡崎空襲

1953年頃、木造アーケードがつくられた

終戦間際の岡崎空襲でまちの8割が消失。松應寺の参道に闇市のバラックができ、現在の木造建築と木造アーケードとなっていく。

小さいころ、料亭から聞こえる三味線と太鼓の音、料理の匂いに大人の世界を感じて嬉しかった。(服部住職)

昭和後期頃まで 花街として栄える

松應寺の境内は花街として栄えていた。今も建物の一部に当時の面影を見ることができる。商店街には駄菓子屋、美容院などもあった。

境内に生活と商売と花街が同居

2011 ターニングポイント 「松應寺横丁まちづくり協議会」発足

境内には「参道商店街」「仲見世商店街」「松屋商店街」があった

空き家・空き店舗となって老朽化した商店街と、少子高齢化の進行をなんとかしようと、松本町町内会、松應寺住職、NPO法人岡崎まち育てセンター・りた職員らにより発足。

取組成果 「松應寺横丁にぎわい市」開催



まちなみの魅力を広く知ってもらうため、松應寺境内と路地、空き家を活用した縁日的お祭りとして開催。趣味の手づくり作家が多く出店し、1000人以上の人が訪れた。以後年に2回(春・秋)を定例化し、毎回1000人を超える集客を誇っている。

(写真提供:NPO法人岡崎まち育てセンター・りた)

岡崎三大祭があるので地域の結束が強い。実行力や運営ノウハウ、お手伝いのネットワークが底力!

2012 取組成果 「松本なかみせ亭」開店

愛知県「新しい公共支援事業」により空き家改修費用を調達し開店。軽食が提供できる厨房と雑貨を販売できる24のレンタルボックスがある。



近所の高齢の常連さんが来ないと心配になって家まで声掛けに行ったり、お客さんと一緒に座ってたくさんしゃべったりと地域の健康寿命を延ばしている店主のお二人!

目標の10年を超え、今年で12年!

2013 波及効果 店舗オープン 「きものゆあん」開店

不明だった空き家の所有者を突き止め、賃貸または売却の意思の確認を進めていった。トラブルを心配する所有者も多かったが、徐々に貸してもよいという物件が出てきて、アンティーク着物店を開店。



あいちトリエンナーレ2013 「松本町包括ケア会議」発足

国際芸術祭の展示会場として3軒の空き店舗が活用された。

「少子高齢化」の課題と向き合うため、町内会長、老人会、民生委員、地域包括支援センター、NPO法人岡崎まち育てセンター・りた職員らで発足。

2014 波及効果 店舗オープン 「一松会員制弁当屋」開店

高齢者のくらしのニーズ調査を実施。近隣の商店やスーパーが減ったため、買い物に困っていることが分かり、「一松会員制弁当屋」を開店。

2016 波及効果 店舗オープン 「おしゃべりサロンじゅげむ」開店



呉服店の建物が、現在は気軽に立ち寄れる「まちの縁側」へ。おしゃべりしたり、お茶を飲んだり、カラオケ、習い事など思い思いにくつろげる。最近では地域の高齢者の麻雀が人気。



2018 「松應寺横丁まちづくり発展会」(商店街組織)発足

「松應寺横丁まちづくり協議会」と新しい店舗らで商店街組織を発足。

観光客がたくさん訪れた。

松應寺横丁まちづくり発展会で空き家をサブリースしている店舗もある。マージンは取っていないが、コントロールできることがメリット

2011年16軒あった空き家は、所有者を調べ、賃貸の意思確認を続けた結果、現在はほぼ空き家はない状態。2024年までに23軒の空き家活用がされ、周辺地域にも新しい店が増えてきた。テナントは副業や退職後の方が多い

2023 大河ドラマ「どうする家康」放送



今後の課題

- ・建物とアーケードの耐震、老朽化をどう延命、更新していくか、改修費の積立てをはじめた
- ・マナーの向上で、観光公害から居住者を守りたい
- ・高齢者のケアを充実させていきたい、「家で死ねるまち」にしたい

高齢者がいきいき暮らすまちでありたい

家康公ゆかりの松應寺に開かれた、暮らしが息づく商店街

>>服部住職

松應寺は家康公の父である松平広忠の菩提のため1560年に建立し、江戸時代には徳川幕府からも重要視され、歴代将軍が参詣していたとても格式の高い寺でした。しかし、1945年の岡崎空襲によって大きな被害を受けて、御廟所と太子堂以外は焼けてしまいました。空襲によって焼け野原になった広い境内には戦後の混乱期に多くの人が集まり、境内では闇市が開かれ、家屋が増えていきました。その結果、お寺の中にまちが形成されてしまったんです。

僕は松應寺に生まれて、昭和40年代から60年代までここで育ちました。当時は花街として栄えていて、料亭から三味線の音が聞こえていました。

しばらく地元を出ていたんですが、2006年に戻ってきたときには空き家が増えていて驚きました。昔は夜の街だったけれど、昼間にも来れる場所にしたいと思いましたね。

>>天野さん

僕は岡崎出身ですが、松應寺横丁がある松本町にはほとんど来たことがありませんでした。2009年頃にたまたま近くの飲食店に来た帰りにふらっと寄ってみたら、路地の中に太子堂と木造のアーケードがあって。街並みに魅かれて度々訪れていたら、服部住職に声をかけられたのが最初のご縁ですね。不審者と思われたのかも(笑)

元々まちづくりを学んでいて、地元で何かしたいと思っていたので「NPO法人岡崎まち育てセンター・りた」(以下、りた)で松應寺横丁プロジェクトに関わっています。

>>柴田さん

私も岡崎には住んでいたけど、松應寺横丁のことはあまり知りませんでした。地元の人でも少し離れたところにいるとよく知らない人が多いんじゃないかな。昔は公設市場や駄菓子屋があって、近くまで来ることはあったんですけどね。



転機となった「にぎわい市」と「あいちトリエンナーレ」

>>天野さん

2011年から「松應寺横丁プロジェクト」を発足し、地元有志のみなさんと一緒に活動をしています。はじめに町民のみなさんにアンケートを取ってみたら、高齢化や空き家の増加が課題であるということがわかってきました。そこで「松應寺横丁にぎわい基本計画」を策定して、にぎわい市の実施やにぎわい拠点づくり、空き家のマッチングなどを計画しました。

>>服部住職

それから2ヶ月くらいで最初の「にぎわい市」をやったから早かったよね。そのときは1000人くらいの来場者が集まって、その半年後にも2回目を開催して盛況だったので、春と秋の年2回開催が定着しました。

松應寺横丁では空き家が多いことが課題だったけど、貸してもいいという人は少なかった。最初はにぎわい市の日だけ場所を借りるところからのスタートでした。

>>天野さん

空き家があっても老朽化が進んでいてすぐに使えない状態だったり、知らない人に空き家を貸すことに抵抗感を持っている方もいます。他人から見ると「空き家」でも、持ち主にとっては「資産」でもあるからです。

そもそも、戦後の混乱期に建てられた空き家は現行法では建て替えが難しいものがほとんどで、さらに家屋や土地の所有者が不明であったり、分筆されていたりと、複雑な事情が絡み合っていました。

まずは建物を借りるために、権利者の方を探して交渉をするという地道なところからスタート。さらには長期間空き家になっていた物件なので、店舗を借りたいという事業者が見つかったとしても改装も困難続きでした。

そんな中で、プロジェクト発足から2年目の2012年には空き家活用第1号となった「松本なかみせ亭」の賃貸契約をすることができました。運よく、りた立ち上げ時の理事をされていた方が松本町のご出身だったご縁もあったので助かりましたね。

>>柴田さん

寒い時期は人も来ないし最初は大変でした。なかみせ亭にはシェアキッチンと自分の作品や商品を守るオーナー制の貸し棚がありましたが、固定店でないとお客さんも定着しづらいですね。

>>天野さん

2013年に「あいちトリエンナーレ」の会場になったことは大きな転機になりましたね。愛知県がトリエンナーレ期間中の3ヶ月だけ松應寺横丁を借りるということで、公的な資金で補修をすることもできました。行政という信頼感のある相手だったこともあって、所有者の方にとっても建物を貸すことへの抵抗感が薄れたのではないかと思います。トリエンナーレをきっかけにして息を吹き返したという印象がありますね。

>>服部住職

おかげで新しい店舗も増え、今は貸せる物件はほとんどないという状況です。この物件は不動産サイトには載らないので、希望者から協議会に直接問い合わせがきて、申請書の内容や面談を経て契約に至ります。しかし、改装のハードルが高いので簡単にはマッチングしません。

でも、トリエンナーレに来て街並みに一目惚れしたという方が出店したり、女性同士で遊びに来る人も増えていたりして、当初思い描いていた「昼間に来れるまち」には着実に近づいていると思います。



人の縁が育ててきた「お年寄りにやさしいまち」

>>天野さん

お店は増えましたが、ハード面での課題はいまも抱えています。そもそも、境内の敷地内にある松應寺横丁は公道に面していないので、一度建物を壊してしまったら再建築することができません。いまはできる限りの耐震対策をしながら建物の延命をしています。

松應寺横丁のシンボルともいえる木造のアーケードは再建築できる場所にあるのですが、参道に面した建物と一体化していることもあって構造的に建て替えも難しい。いずれはハード面の更新も考えなければいけないのですが、現在の基準に合わせるとこの風景が生み出す風情を残していくことは難しいのではないのでしょうか。

>>服部住職

こうしてにぎわいが生まれたことはありがたいのですが、やはり「観光公害」という課題も気になりますね。境内は神聖な場所なので、マナーを守って遊びにきていただくとありがたいです。イベント時は住民の方への騒音対策にも気遣う必要もあるので、住民・お店・お寺のそれぞれの立場でにぎわいとマナーを両立していくことも大切だと感じています。

松應寺横丁の特色としては商業的なカラーだけでなく、近隣住民の高齢者の方の見守りという側面もあります。なかみせ亭をはじめ「おしゃべりサロンじゅげむ」(以下、じゅげむ)のように地域の方が活動できる拠点もあり、住民の見守りができるようになっています。

>>天野さん

公設市場がなくなってからは、買い物は徒歩10分ほどのところにある商業施設に行かなければならず、移動手段を持たない方にとっては大変でした。2021年からは河西さんのご家族が始めた移動スーパーが定期的に来てくれるようになって、地域の方にも喜ばれています。松應寺横丁のある松本町では「松本町包括ケア会議」と

いう活動もあり、地域が主体となって包括ケアに取り組むロールモデルにもなっています。介護予防・支援の先進的な地域として、岡崎市内でも「お年寄りにやさしいまち」として注目を集めています。

>>河西さん

2014年にはなかみせ亭もリニューアルしてモーニングサービスを始めることができ、近所の高齢者の方も常連さんとして通ってくれるようになりました。この辺りは一人暮らしの方も多いから、お客さん同士や私たち(河西さん、柴田さん)とも顔なじみになって交流が生まれたことは本当によかったなと思っています。

夫が移動スーパーを始め、私もなかみせ亭に携わっていて、自分たちにとっても居場所ができたと感じています。柴田さんご夫妻はいまでは松應寺横丁のお父さんとお母さんのような存在ですね。人の縁がつながって、こうして10年やってくることができました。

>>柴田さん

長く専業主婦をしていて、まさか松應寺横丁でお店をやることになるとは思っていなかったけれど、自分自身の生きがいにもなりましたね。自分より年上の常連さんと仲良くなったりして、皆さんとお話するのが楽しみです。夫がじゅげむを運営しているので、夫婦ともに生き生きと過ごすことができます。

>>天野さん

愛知県から補助金をもらっていることもあってすぐにやめるわけにもいかないし、最初はどうかと思ったけれど(笑)。でも、続けてきたら10年はあつという間だったなという感じもします。課題が全てなくなったわけではないですが、これからも地域のみなさんと一緒に元気に長く続けていくことが目標ですね。



人との縁がきっかけで出会った松應寺横丁に居場所ができました
河西公子さん
松本なかみせ亭 店主

不思議な街並みに惹かれて関わりだした松應寺横丁にまちづくりの学びを還元したい
天野裕さん
岡崎まち育てセンター・りた事業企画マネージャー



住民・お店・お寺が互いを思いやり、共存できる商店街にしていきたい
服部善樹さん
松應寺住職



お客さんとの交流は自分にとっても楽しみで生きがいのひとつ
柴田智子さん
松本なかみせ亭 店主



柴田雅人さん
おしゃべりサロン・じゅげむ 管理・運営

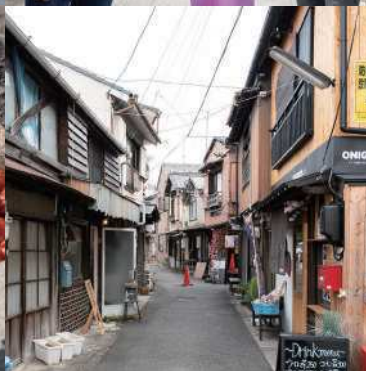
松應寺

天文18(1549)年3月、家康公の父、岡崎城主松平広忠公は城中で家臣に刺殺され、亡骸は能見ヶ原の月光庵に埋葬された。同年11月、家康公は今川方の人質として熱田から駿府へおもむく途中、月光庵に参り、その墓上に小松を植え、松平一族の繁栄を祈願した。

永禄3(1560)年家康公は桶狭間の合戦後、岡崎城主となり、非業の死を遂げた父の菩提のため、月光庵の地に寺を建立。家康公は手植えの松が緑深く伸長したこと、人質の身であった自分が城主として再び三河の地に帰れたことを喜び、その寺を松應寺と名付けた。



SHOJI YOKOCHO



愛知県 商店街空き店舗活用モデル事例集
CASE08
犬山市 犬山下本町商店街

13 | 14



伝統をつなぎ、人と人をつなぎ、
まちと人をつなぐ。



犬山下本町商店街 いぬやましもほんまちしょうてんがい

犬山城から城下町を通り抜けた先、目の前に広がるビル群の景色が犬山下本町商店街の入口です。左右に整然と建ち並ぶビルには、昭和レトロな佇まいに魅了された店主たちの個性豊かでおしゃれな店舗が点在しています。2023年に60周年を迎えた犬山下本町協同組合の役割は、ますます大きくなっています。江戸時代から続く犬山祭を伝承するとともに、縦だけではなく横のつながりを深める“まちの拠点”へ。ここにしかない魅力を求めて集う仲間たちと、歴史を刻み続けています。



1537 犬山城築城

天文6年(1537年)、織田信長の叔父、織田信康によって築城。城下町は犬山城創建に伴い、もともとあった町を整備して作られた。現在も江戸時代と変わらない町割りそのまま残り歴史的な建造物が建ち並ぶ。

1635 犬山祭が始まる

犬山祭は犬山城の麓に鎮座する針綱神社の祭礼。下本町が馬の塔を、魚屋町が茶摘みの練り物を出して始まった。寛永18年(1641年)には下本町が車山(やま)に変えて人形からくりを奉納するようになり、江戸中期までには今の犬山祭の原型ができあがった。

昭和初期 「銀座」と呼ばれるほどにぎわう



江南市や岐阜県美濃加茂市などからもたくさんの客がきて大繁盛していた。

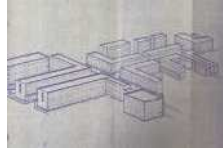
ビル建設前の下本町の様子。アーチは祭の車山が通れるよう可動式だった
(写真提供:犬山下本町商店街振興組合)

犬山祭の見どころのひとつ、車山(やま)。13軒の車山は1964年に愛知県有形民俗文化財に、犬山祭の車山行事は2006年に国の重要無形民俗文化財に指定され、2016年にはユネスコの世界無形文化遺産にも登録されました

1963 犬山下本町協同組合設立

1968 「下本町防災ビル」完成

ビル完成直後や、1976年山形県酒田市の大火の後などには、様々な自治体から視察が相次いだ



左:当初の防災建築街区の計画図、中:七夕の売り出しの様子、右:アーケードの様子
(写真提供:犬山下本町商店街振興組合)

七夕や年末の売り出し、盆踊りなど下本町だけの祭りも盛んだった。昭和50年代の七夕まつりが最後に

ビルは表に店、奥にはなれの住居がある。住居との間に4mの防火道路があった

1975 名濃バイパス開通

名古屋市から豊山町、小牧市、大口町、扶桑町、犬山市、岐阜県可児市、美濃加茂市まで結ぶ国道41号バイパス。岐阜の客が名古屋へ流れるきっかけになった。

1988 キャスタ・イトーヨーカドー開店

犬山駅東口に商業施設「キャスタ・イトーヨーカドー」が開店。開店にともない、下本町からも3軒が移転。

2000 ターニングポイント 「どんでん館」オープン



「どんでん館」オープンを機に城下町のまちづくりが進み、昭和横丁にはテレビ取材も。犬山祭で曳かれる高さ8mの車山(やま)を4台展示。

下本町の車山も「どんでん館」に展示されていて趣向を凝らした人形からくりが見られる

2010 シャッターアート

商店街のシャッターに描かれたカラフルな犬の絵は市の事業で大学生が描いた。

2012 ターニングポイント 「よきやビル」賃貸開始

4階建の元家具屋を貸しビルへ。

よきやのビル現オーナーの祖父母が開業した後、約20年シャッターが降りたままだったビルを引き継ぐ。固定資産税を支払うことが貸し出すキッカケに

雨漏りが大変!水漏まりがいくつもできるほどだった。トータル5年掛けて修繕

波及効果 物件活用

よきやのビル現オーナーが2017年5階建の元家具屋「タカラヤビル」を購入、貸しビルへ。

賃料を抑えて若い方が挑戦できる場になるようにフロアごとに区別して貸し出し。

2015 アーケード撤去

ビル建設当時のアーケードが一部破損したのを受け、補助金を活用して撤去を決断。

2019 ターニングポイント 「糸友」オープン



セレクトショップ&デザインストア「糸友」オープン。前身は大正15年創業の布店。

お城近くの古民家、中本通りは市外から来て出店している人が多い

このビルの雰囲気にあこがれている人はいっぱいいる。口コミで紹介を辿って入居した

波及効果 店舗オープン

2023年3月に木製蝶ネクタイの店「QISUI INUYAMA GATEWAY」をオープン。

2023 取組成果 犬山フルまちミュージアム 夏まつり



犬山フルまちミュージアム実行委員を立ち上げ、8月に夏まつりを開催。民謡、ジャズ、ヒップホップと多彩なアーティストによるライブや、「犬山城下町の50年前のにぎわい」展を開催して当時の写真展示などを行った。

波及効果 イベント実施 犬山フルまちミュージアム

11月にはアート+クラフトをテーマにしたイベントを開催。アート作品の展示や8ミリフィルムのホームムービーの上映会など行った。

今後の課題

- ・一体化したビルの耐震など老朽化が課題
- ・ビルの空き室の賃貸は地域の不動産屋か口コミ紹介なので、空き物件のマッチングや紹介に協同組合としても積極的に関わってきたい。

ビルの魅力、地域の歴史に魅力を感じる個性的な人たちとまちを盛り上げたい。



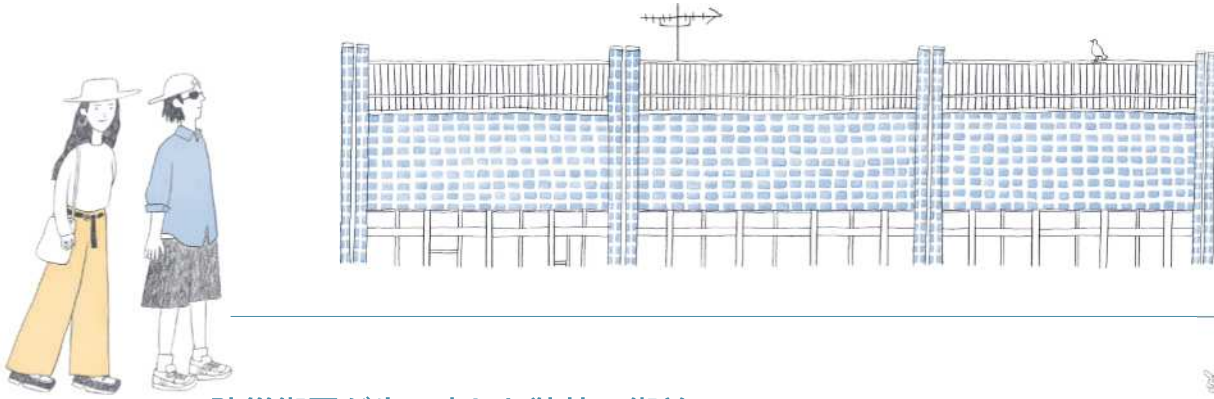
新しくビルに出店した人たちも横のつながりをつくるイベントを開催。これからも単発のイベントを続けて、地域の代名詞になるようなイベントができれば!

城好きの田村淳氏が犬山城をテレビで紹介したことも注目されるきっかけに



防災建築街区

1961年に防火建築街区造成法施行。それまでの耐火建築促進法で対象としていた防火だけでなく、津波、高潮、出水による災害防止を目的とした防災建築物の整備が促進され、市街地の再開発事業＝防災建築街区の造成が進められました。商業空間や居住空間の整備、近代的街並みの形成等にもつながることから、多くの都市で実施されました。犬山の城下町は木曾川からの西風が吹き、建ち並ぶ木造家屋の延焼が懸念されていました。下本町は自営の商店が大半だったため補助金を活用して建て替えを決行したものの、中本通りはサラリーマン家庭が多く、建て替えは実現しませんでした。下本町には通りの両側に、3～6階建ての鉄筋コンクリート造の建築が6期にわたって建設されました。



防災街区が生み出した独特の街並み

>>大倉さん

この辺りは戦前から個人商店でにぎわっていました。岐阜県の子供や御嵩、八百津の人たちも買い物といえば犬山に出てきて、たくさんお客さんが来ましたね。木造の商店が並ぶ通りにはアーチもあって。犬山祭の車山(やま)が通る際には開閉できるようになっていたんですよ。1960年代に防災ビルを建てないかという話が出て、段階的に現在のような鉄筋コンクリートのビル群ができあがっていきました。

>>小川さん

ビルの計画が立ち上がった頃に犬山下本町協同組合もできて、2023年に60周年を迎えました。

>>柴田さん

僕が子どもの頃は営業しているお店も今より多くて、もっと下本町商店街もにぎわっていました。ビルにはアーケードもついていて、平成の終わり頃の風防の撤去時に壊れてしまったのを機になくなりましたが、子どもたちはビルの2階の窓からアーケードの屋根伝いに隣のビルへ渡ったりして遊んでいましたよ(笑)。

>>大倉さん

下本町商店街だけでも七夕祭りや盆踊りをやったりし

て、にぎやかでしたよね。最後にここでお祭りをやったのは昭和50年代くらいかな。

>>永津さん

僕は犬山出身なのですが、下本町にこんな魅力的なビル群があるとは知りませんでした。仕事の撮影で初めて来たときにこのビル群の佇まいに心奪われて。ご縁があって、1年前にショップをオープンしました。交差点の北(お城側)と南(下本町商店街)でがらっと風景が変わりますよね。そのコントラストも独特でおもしろいなと思っています。たまに店から見ていると、城下町から来た観光客で下本町の写真を撮っていく人もいますよ。

>>大倉さん

自分たちには昔から馴染みのあるビルだけれど、古くなったビルの街並みに魅力を感じて、写真を撮っていく人たちがいるのはおもしろいですね。

>>小川さん

古さが魅力である一方で、築60年近い大規模なビルなので維持や修繕の問題はあります。長屋式に所有者が複数いたり、電気系統が共有であったり、建築時期によって状況もさまざまです。



犬山は祭りで人の関係性が醸成されている文化がある

大倉茂紀さん
シューズハウスオークラ店主
犬山下本町商店街協同組合 前理事長



思いがけない人や発想がビルに集まってきてどんどん面白くなっています

小川博隆さん
司法書士小川事務所
犬山下本町商店街協同組合 理事長



横のつながりを育てて自分が育った商店街を活性化させたい

梶田雄一さん
セレクトショップ&デザインストア糸友 店主



下本町商店街はコアな魅力とこだわりを持った人が多い場所

永津知輝さん
木製織ネクタイブランド QUISUI 店主



変化する人と時代の流れ、暮らしから観光のまちへ。

>>小川さん

昔は犬山駅の西側と東側で人の流れもずいぶん違いましたよね。商店街があって、人通りが多いのが西側のこのエリアでした。

>>大倉さん

昭和の終わりに駅の東側にあった紡績工場跡地にイトヨーカドーができました。当時は、駅前のショッピングセンターに出店するなら、ここでの個人商店を閉めなければいけなかったんです。うちも商店街にあったお店を閉めて駅前に出店したし、他にも同じように移転していくお店が増えて、一気に商店街のにぎわいがなくなっていました。

>>小川さん

昭和の終わりから平成にかけてどんどんシャッター街になって人の流れも変わっていききましたよね。僕も実家の百貨店を手伝ったりしましたが、だんだんと廃業に向

かっていって。

>>柴田さん

うちは父の代で布団店を閉め、僕自身は外に勤めに出てアパレル企画の仕事をしていました。いずれは地元で何か還元したいという想いをずっともっていて、子どもの成長を機に生まれ育った下本町商店街に戻ってきました。犬山祭で自分も車山を曳いていたので、子どもにもやらせたかったというのも大きかったです。

>>大倉さん

商店街とは別の動きですが、ここ15年くらいで犬山城と城下町が一気に観光地化して人が来るようになりました。第三セクターのまちづくり会社ができたり、テレビで犬山城が紹介されたりして、この商店街にも大学生がシャッターに絵を描きに来ましたよ。城下町の方では外から来て、観光客向けの商売をする人が多いですね。



個々のポテンシャルが光る下本町商店街のこれから。

>>小川さん

協同組合としてお店を誘致しているわけではないけれど、最近新しい商売を始める人が増え、ビルを借りたい人は物件のオーナーへ個別に連絡を取って入居しています。

>>永津さん

僕は外から来た人間ですが、下本町は知る人ぞ知る場所という「コアな感じ」が魅力だと思います。この雰囲気に惹かれて集まる人たちは、みなさん個性的。自分のキャリアや特色を活かしたお店ばかりで、尖ったコンテンツがお客さんに受けています。“この場所に対する想い”という共通点があるのは、下本町の強みですね。

僕の店「QISUI(キスイ)」がある場所は元々手芸屋さんがあった場所で、自分も木製の蝶ネクタイや装身具を作っているの、そうした場所の持つ歴史との親和性があるのもいいなと感じています。

>>小川さん

ここ20年程で商店街が変化した理由として、若い世代が思いがけない商売を始めていることが大きいと感じています。それぞれニッチな分野で個性的な活動をしていてもちゃんと商売として成り立っていて。謎は多いんですけど(笑)。そういう自分たちが思いつかない発想のお店が一つひとつ増えてきたことが、今につながっています。

>>大倉さん

こだわりやビジョンをしっかりとっている人たちが自然と集まってきていて、下本町の魅力もどんどん広がっています。

>>柴田さん

商店街としてもこのままではいけないと、2023年には8月にミュージックフェス、11月にアートイベントを開催しました。イベントは楽しくやれるのが理想的ですね。

>>小川さん

私もミュージックフェスにジャズカルテットで出演しました。何かこの地域の代名詞になるようなイベントができていくといいのかなと思います。

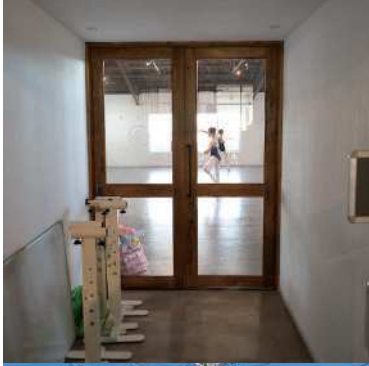
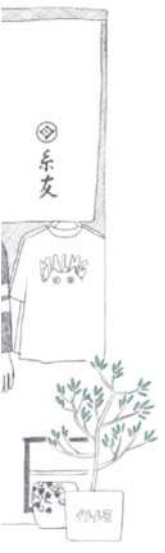
>>柴田さん

新しい人たちともつながりを深めていきたいですね。犬山祭はあもすもなく(否応なく)1年間通してやるのがあって生活の一部となっており、祭りのコミュニティでは代々、次の世代へ教えていく仕組みがあります。地域全体で協力する祭り文化があるおかげで地域の結束が強くなり、その良さも活かしたいです。また、城下町の方では祭りに城に城下町に飲食店、土産物屋と、足し算で観光地として盛り上げていった印象があります。下本町は一見シャッター街に見えて、実は他に比べて昔から商売している方がまだまだ多い地域。昔からの人脈や文化を尊重できるような商売でまちを盛り上げ、活性化につなげられたらいいなと思います。

>>小川さん

下本町商店街を訪れる人が他にはない魅力を感じてくれるのはうれしいので、長くこの場所を盛り上げていけるようにがんばっていきたいです。これからは協同組合として横のつながりを広げる仕組みづくりもできたらと考えています。物件のオーナーさんにとっても、場所を探している人にとっても良いご縁が生まれるようにサポートしていきたいです。



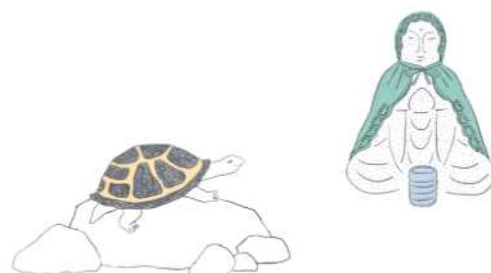


SHIMOHONMACHI



愛知県 商店街空き店舗活用モデル事例集
CASE09
名古屋市 笠寺観音商店街

19 | 20





まちづくりの可能性を広げ
人と人のつながりを生む「シェアする」という考え。

笠寺観音商店街 かさでらかんのんしょうてんがい

名古屋市南区、名古屋鉄道名古屋本線「本笠寺駅」から東へ。旧東海道沿いに位置し、笠寺観音の門前町として発展した笠寺観音商店街。まちづくりの活動が本格的に動き始めたのは2007年、楽しく暮らしやすいまちを目指し、まちづくりの会「かんでらmonzen亭」が発足しました。さらに、2018年に名古屋市の商店街商業機能再生モデル事業「ナゴヤ商店街オープン」の舞台に選出されたことを契機に、まちづくりが加速。「シェア」をキーワードに、可能性とつながりを広げています。



2万年前 旧石器時代

海に面した台地だったこの地には旧石器時代から人が住み続けている。

733 笠寺観音の起源
「小松寺」建立

奈良時代に笠寺観音の起源となる小松寺が建立され、平安時代には玉照姫の逸話をきっかけに寺の名前が天林山笠覆寺(りゅうふくじ)となり、尾張四観音の一つ「笠寺観音」が誕生した。旧東海道沿いであることと門前町ということでまちは栄えていった。

1917 愛知電気鉄道笠寺駅開業

愛知電気鉄道は、名岐鉄道との合併で名古屋鉄道となった。1943年に国鉄東海道本線に笠寺駅が開業したことに伴い、「本笠寺駅」に改称。

1943 名古屋市電笠寺線開業

太平洋戦争中に笠寺線・笠寺延長線が開業した。

最盛期には商店街に約80店舗が加盟。飲み屋も多く、映画館やホールディング場など歓楽街として賑わった

1959 笠寺観音発展会設立

笠寺観音発展会ができた頃は、高度成長期で景気が良く、集金などもスムーズだった。

1974 名古屋市電笠寺線廃止

沿線の工場や学校への通勤通学路線として多くの人に利用された市電は全廃された。

たくさんの通勤客や学生が名鉄との乗り換えでまちを通過していたが、市電から市バスへ転換、後に地下鉄もでき、まちを歩く人が急激に減った

1996 ユニー笠寺店閉店

環状線と旧東海道が交差する交差点に立つ大型スーパー「ユニー笠寺店」が閉店。マックスバリュへ建替えとなる2012年までの間に、空きビルはまちづくりのイベントに使われることもあった。

商店街には喫茶店やレコード店、衣料品店、靴屋、笠寺の笠屋などがあつた

コンビニの普及が商店街の役割に大きな影響をもたらしたと感じる

2007 **ターニングポイント**
「かんでらmonzen亭」立ち上げ

商店街や町内会、笠寺好きの人たちで笠寺まちづくりの会「かんでらmonzen亭」を立ち上げた。旧ユニー笠寺店のショーウィンドウを整備し「笠寺アートスペース」をオープンし、貸し出しの運営を行う。その後も精力的に活動を重ねていく。

地域では本当に醤油の貸し借りがあつたし、井戸端会議をしていた

2018 **ターニングポイント**
ナゴヤ商店街オープンに手を挙げる

様々な属性の参加者と一緒に、模型を見ながらディスカッション。笠寺観音商店街にある空き店舗に何かがあるといひか、それがどうまちに波及効果を生むのかを検討。



2019 **取組成果**
「かさでらのまち食堂」オープン



「シェアする」というコンセプトのもと、日替わりシェフの食堂「かさでらのまち食堂」をオープン。その後も精力的に活動を重ねていく。

初年度はスケジュールがカツカツ大変だった!

波及効果 物件活用

- ・かさでらのまちビル (2020)
- ・Yasai BASE (2024)
- ・BUTAKOYA BOOKS (2025.7予定)

かさでらのまち食堂が入っているビル全体を「シェアする」というテーマで改修。民泊、寺子屋、シェアオフィスの事業者が入った

波及効果 社会実験

「かさでら道くさ社会実験」実施 (2021)



名古屋市の「地域まちづくり活動助成」を活用した社会実験を実施。日替わりの移動式販売「軒先ワゴン」、名古屋市図書館が参加した「ヤドカリBOOKワゴン」、3か所の民地の壁を使った「壁コミュニケーション」等



2023 **取組成果**
「かさでらのまち箱」オープン



ナゴヤ商店街オープンへのイノベーション事業に応募。檜の浴槽を作る瀧本浴槽店があつた建物を改装し、3分割して安く借りられるようにして図書館、和菓子屋、アンテナショップの事業者が入った。

2回目の
2023 ナゴヤ商店街オープン参加

前回は参加者の1人だった「かさでらのまち食堂」宮本さんがアドバイザーとして関わる。

2024 **取組成果**
「マチ・スタンドmotokasa」オープン



コーヒー&ビールスタンド「マチ・スタンドmotokasa」が本笠寺駅前にオープン。

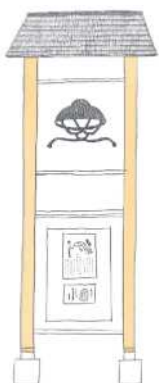
笠寺観音商店街や地域の日常に潜むヒトモノコトを取材・編集・発信する「かさでらのまち編集室」も発足

今後の課題

- ・入居希望はあるのに物件がない、物件の開拓が必要。
- ・シェアする物件を運営するむずかしさはある。向き不向きがあるので適当でありたい。

やりたいことを持ってきてくれた人を応援するまちでありたい。

まつりの多い地域で、笠寺の南にある笠寺七所神社のまつりは「ぬえ」や、「しょうじょう」の衣装で練り歩く他にも地域のこどもの「けんか神輿」も以前やっていた



ナゴヤ商店街オープンとは

2018年、名古屋市経済局地域商業課の「商店街の商業機能再生を図るためのモデル事業」としてスタート。「空き店舗リノベーション事業」と「外部人材交流促進事業」を通して、名古屋市内の商店街の活性化に取り組むとともに、まちのサポーターやプレーヤーの育成を目指す事業です。笠寺観音商店街は初年度の2018年と2023年に「空き店舗リノベーション事業」の実施商店街として採択されました。

※「空き店舗リノベーション事業」では、これまでに名古屋市内8商店街11軒のお店がオープン、1軒のプロジェクトが進行中です(2025年1月現在)。



門前町に生まれた「やりたい」を実現するまちづくり活動

>>伊藤さん

笠寺には旧東海道や笠寺観音があって、古くから多くの人が行き交う土地柄です。1974年まで市電が残っていて、名鉄本笠寺(もとかさでら)駅から市電・市バスに乗り換える人や、大江や東名古屋港に働きに行く人、今池や大曾根に行く人もいて、それは多くの人で賑わっていましたよ。昭和30~40年代の高度経済成長期は景気がよくて、映画館やボウリング場なんかもあって、歩行者天国をやったときなんかは人が押し寄せて歩けないほど。当時は80店舗くらい商店街に加盟していたんじゃないかな。

>>宮本さん

私は笠寺で生まれ育って「本を買うならここ」というように、子どもの頃から商店街の行きつけのお店がありました。祖母は毎朝観音様へ行って、帰りにモーニングを食べるのがルーティンで、よくついていきましたね。高校生や大学生くらいになると地元から外へ目がいくようになったのですが、また地元が目に向くようになったときにはすっかり賑わいがなくなっていました。

>>青山さん

バブルの崩壊や大型スーパー進出の影響もありますよね。また、今ではモノを買うだけだったらネットで十分だし。商店街の役割が大きく変わってきていると考えています。

>>伊藤さん

地下鉄の桜通線ができてからは、市電時代のように岡崎や豊明から来る人が本笠寺駅で乗り換えるということもほとんどなくなったね。野並から栄方面に行く人は地下鉄で行くから、笠寺の通行量が顕著に減ったというのも

大きな影響だと思います。それがちょうど平成初期のバブル崩壊と同時くらい。あとはコンビニも増えたしね。何でも売っているコンビニは商店街の縮図のようなもの。平成以降は景気が悪くなって、代替わりせずに閉める店も増えたね。

>>青山さん

僕は地元の人間ではないけれど、仕事で東京に2年間出向した後名古屋に戻ってきて、東京で一番好きになった下北沢みたいな街をつくりたいと思ったのが原点です。それで場所を探しているときに笠寺と出会って、当時商店街の理事長だった伊藤さんにネット経由でメッセージを送ったのがはじまりですね。2007年に「かんでら monzen亭」という会を作ってまちづくり活動を始めて、笠寺観音商店街と連携してイベントなどをやってきました。ユニー撤退後の空きビルを拠点にして、学生と一緒にファッションショーやアートイベントをしたことも。他には笠寺観音の境内を借りて落語をしたり、お寺の池に住んでいる亀の住民票を作ったりね。面白そう・やりたいとみんなが考えていることを10年の間に1つずつ実現していました。

>>宮本さん

私は当時地元を歩きながら「なんか変なことをしているな」と思って見ていました(笑)。

>>青山さん

拠点としていたユニーの空きビルが取り壊しになってしまっって、その後、金物屋さんの物件を新たな活動拠点として借りた頃に宮本さんが見に来たのが最初の出会いでしたね。



毎日お店に立つことが原動力
地元の人が、「何かやりたい」という人を
理解して受け入れていくことが大切

伊藤邦一さん
ミハル2代目店主
笠寺観音商店街振興組合 前理事長



スキルや場所をシェアしながら進める
活動には寛容さが大事
適当さ加減が合っていると上手くいく気がする

宮本久美子さん
建築士、かさでらのまち倉運営代表
笠寺観音商店街振興組合 副理事長



どんな人が来てくれてもうれしい
常山抱いざをみんなで応援する街にしたい
笠寺観音商店街振興組合 理事長
かさでらのまちビルオーナー



地元・笠寺の変化にびっくり
笠寺に関心を持っている人がたくさん
集まってきてうれしい

伊藤修平さん
ミハル3代目、デザイナー



スキルも場所もシェアして活かすまちづくりを实践

>>宮本さん

私は事業を運営するナゴノダナバンクの藤田さんに誘われて、2018年に名古屋市の商店街商業機能再生モデル事業である「第1回ナゴヤ商店街オープン」に参加することになったのを機に、地元のみちづくりに関わるようになりました。ナゴヤ商店街オープン自体も初年度だったから手探りだったし、今より笠寺に関わっている人も少なく、スケジュールもタイトでとにかく大変でした(笑)。

>>青山さん

イベントを始めとしたソフト面での活動を10年やり、土台ができてきたからそろそろハード面でのまちづくりを展開したいと考えてナゴヤ商店街オープンに手を挙げました。ここから数か月で予期せぬことが一気に起こったドラマのような展開でしたね。いろんな事情が重なって、「かさでらのまちビル」のオーナーにもなりました。

>>修平さん

僕も2021年に駅前の道を使った「道くさ社会実験」でのコーヒー出店を機に関わるようになって、こんなに多くの「何かやりたい人」が笠寺にいたんだ、と驚きましたね。

>>宮本さん

まちづくりには重要な存在が4人いると考えています。それは「建築家」「不動産屋」「デザイナー」「ステーキホルダー」。この中でデザイナーが不在でした。デザインはとても大事だと思っていて、誰か良い人いないかなと思っていたら、修平さんがデザインもやれる人だと知って「ぜひ一緒にやりませんか?」と巻き込みました。まちの人のスキルをシェアして活躍してもらおうのが理想です。

2019年5月に「かさでらのまち食堂」、2020年4月に「かさでらのまちビル」がオープンしましたが、ちょうどコロナ禍が始まった時期で大変でした。特に食堂と民泊に影響がありましたね。できることを模索していくうちに、地元の人に来てくれるようになったのは良かったです。外の人との連携を意識するきっかけにもなりました。

>>青山さん

最初はコロナ禍で苦戦した民泊の方もV字回復しています。お客様は名古屋に滞在する外国人の方が多いですね。笠寺を拠点に別のエリアに行く人が多いですが、笠寺も門前町の歴史があって面白い場所なので、ここを目的に来てくれる人も増やしていきたいです。

>>宮本さん

2023年2月には「かさでらのまち箱」もオープンしました。社会実験を経て本を介した密なコミュニケーションが取れることがわかったので、次に空き店舗に何か作るとしたら本のある空間がいいなと考えていたんです。これまでの経験から、仕事をシェアする副業的な商店街への関わり方の可能性を見出していたこと、1事業者だけで成り立たせるには賃料の負担が大きいのが課題だったので、3事業者でシェアする形に。その結果「事務所・アンテナショップ」「和菓子店・チャレンジショップ」「かさでら図書館」が誕生しました。かさでら図書館は一箱ごとに本棚のオーナーさんを募り、本の貸し借りや販売をする私設図書館で、今は80箱ほどのオーナーさんがいます。事業者となった坂本さん・八町さんが本棚オーナーさん同士の交流の機会も作っていて、本を介したコミュニケーションが生まれています。



23 | 24

駅前に新たな拠点づくりが進行中。まちの編集室から発信も

>>青山さん

物件との出会いもご縁です。まちづくりを始めてから、井戸に始まって、活動拠点や倉庫、養蜂ができる場所などをずっと探しているの、周りの人に物件を探していることが知られてきて紹介してもらえることも。物件探しを始め、まちづくりにはやはり地元の人たちとの信頼関係が大切です。地元の間人関係を熟知している伊藤さんのようなキーマンが欠かせないからこそ、「かんてらmonzen亭」の代表になってもらいました。

>>宮本さん

2度目のナゴヤ商店街オープンでは、駅前にコーヒー&ビールスタンドがオープンしたところです。お店としての機能に加えて人を巻き込む仕掛けを作って、関係性を育てていく場所にしたいですね。「かさでらのまち食堂」で「ファンづくり・食のプレイヤーの繋がり」ができ、「かさでらのまち箱」では「本を介した新たな人同士の出会い」が生まれています。他にも2つの社会実験を通して思考の幅が広がりました。ナゴヤ商店街オープンがきっかけで、笠寺のまちの「ヒト・モノ・コト・空気感」を文章や写真、空間を通じて発信する「かさでらのまち編集室」の活動も生まれています。新たな場を拠点にまちの編集室の活動を育てて「地域としての発信力」をつけていきたいです。

>>修平さん

商店街自体はシャッターが開まっているところもあるけれど、確実に動きが大きくなっているとも感じています。自分もデザインに関わるようになりましたが、巻き込む

人だけでなく、巻き込まれる力も大事なのかなと思います。

>>伊藤さん

歴史が長い商店街だし、古くから住んでいる人も多いので、地元の人に理解してもらうことも大切。宮本さんと青山さんが入ってきたとき、最初はどんな人かわからなかったけれど、地元の人が若い人たちや何かをやりたいという人に、いい場所をどう提供していくのか。その折り合いをつけていくことも必要だと思っています。

>>青山さん

僕が来てからの14年間は伊藤さんが商店街の理事長だったので、地元との交渉や相談など様々な場面で間に入っていたって助かりました。伊藤さんはいずれミハルを修平さんに事業承継していく予定で、商店街のことも次世代にバトンを繋いでくださっています。地元の方の次世代への理解や、外からくる人への寛容さがあるのだと感じています。

>>宮本さん

笠寺は長年住んでいる人も多く、井戸端会議や醤油の貸し借りのような住民同士の関係性が濃い地域だから、外から来たコンサルタントが入りにくい場所かもしれませんね。私自身は、関わる人が好きなことを好きなだけ表現できるまちであれば良いと思っていて、建築やデザインを通じて変化し続けていければと考えています。





KASADERAKANNON

愛知県 商店街空き店舗活用モデル事例集
CASE10
蒲郡市 蒲郡商店街

25 | 26





人と暮らしに寄り添い、走り続けた先人たち。
その歴史と想いが、いま次の世代へ。

蒲郡商店街 がまごおりしょうてんがい

JR・名鉄「蒲郡駅」周辺の8つの発展会で組織する蒲郡商店街。人にやさしい商店街を目指し、平成15年に中央通りで歩道整備プロジェクト「Rocken Road (ロッケン・ロード)」を実施。翌年には会場を歩行者天国にして開催する「福寿稲荷ごりやく市」がスタートしました。今や商店街の代名詞とも言える同イベントは、20年の節目となる令和6年、実行委員が世代交代へ。同年、駅北商店街活性化チームや蒲郡を拠点とするイベント運営グループが立ち上がるなど、いままさに、蒲郡商店街に新しい風が吹き込んでいます。



愛知県蒲郡市本町



1940頃 繊維業で栄える

「日本後記」によると平安時代から織物が行われていたとされ、後に三河織物へと成長していく。昭和40年代には織物・繊維ロープ工業が製造品出荷額等の8割近くを占めるほどになった(蒲郡市ホームページによる)。商店街の北側にたくさんあった機屋(はたや)で働く女性労働者たちが商店街を利用して活気があった。



左:昭和28年の中央通り5丁目辺りの様子。店が建ち並んでいるのがわかる
右:昭和57年の銀座通りあたりの様子。歩道にアーケードがかかっている
(提供:蒲郡商店街振興組合)

1950頃 銀座通りが防火帯建築となる

耐火建築促進法によって銀座通りを防火帯建築とした。現在は老朽化から取り壊しが続いている。

1964 「蒲郡商店街振興組合」発足

8つの発展会で組織される「蒲郡商店街振興組合」発足。

複数の発展会がひとつの振興組合を組織するのはめずらしい。各発展会が一体となってまちの盛り上げりを形成してきたことがうかがえる

1971 ユニー蒲郡店オープン

駅の南側に大型店「ユニー蒲郡店」がオープン。

振興組合は、商店街で働く人のために16世帯ほどの5階建てアパートを社宅として保有していた。このアパートの家賃収入は、祭りなどの財源となっていた。(2023年に売却)

1970頃～ 祭りが盛況だった

盆踊りは丁目ごとにやぐらを立てたので、中央通りに6つもやぐらが並んでいた



左:中央通りの盆踊りの様子
右:銀座まつりの様子
(提供:蒲郡商店街振興組合)

昭和50年代から平成に入る頃までが最盛期。通りに5件も銀行があった

1988 ジャスコ蒲郡店(現イオン)移転

竹谷町へ移転。

商店街の中にヤオハン(スーパー)やジャスコができたときは反対もあったが、祭りに協力してくれたら関係性がよくなった。撤退したらまちが暗くなってしまう。大型店にネガティブな印象はない

1999 ヤオハン蒲郡店閉店

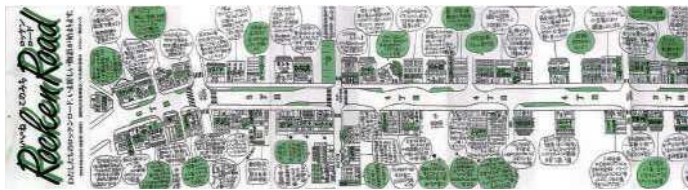
2000 アピタ蒲郡店オープン

ユニーの跡地に「アピタ蒲郡店」がオープン。

2001年の中央フェスタではプロレスもやった!

2003 「Rocken Road」実施

中央通りが国道から市道になるのを機に、歩道整備プロジェクト「Rocken Road」を実施。車の速度を抑制するシケインと、バリアフリーが特徴の道路となった。マップも作成した。



2004 「福寿稲荷ごりやく市」開催



通行止めにするため住人からの反対もあったが、今では出店者にファンもついできている

2000年代初頭、飲み屋街で賑わっていたあたりにマンションが立ち並ぶにつれ、店はなくなっていった

2010頃 銀座通りのアーケードを撤去

老朽化から銀座通りのアーケードを撤去した。

振興組合ができたころは250店ほどの加盟店だったが現在では90店ほど

ターニングポイント

「蒲蛙(がまがえる)」立ち上げ

蒲郡市在住、古き良き賑やかな蒲郡を再建すべく立ち上がった同級生4人組のまちづくり団体。

ごりやく市の会議参加や出店、オダフルーツの駐車場を借りての野外居酒屋イベント開催などに取り組み中

ターニングポイント

「G-Walkers」立ち上げ

地元出身の居酒屋「ごすけ」のふたりも関わって、商店街の飲食店やキッチンカーが集まる「屋台村祭り」を開催。

波及効果 イベント実施



30代・40代が元気! 出かけると毎週のようにどこかでイベントが開催されていて、ここ何年かまちづくりの動きを感じる

昔、商店街にあった温泉を復活させたい!

ターニングポイント

「がまきたいっか」立ち上げ

商店街の活性化を目指す店主や有志の集まり。6月には蒲郡を回遊して巡るイベント「GAMA-GO-ROUND」、12月には子どもたちのクリスマスマーケット「GAMA-GO-ROUND vol.2」を開催。

波及効果 イベント実施



駅前の防火帯建築は雨漏りがひどく住民も高齢者で管理組合もない。核になる人もいないことで取り壊しとなっていく

2階が住まいだと、1階は貸しにくかったり、出入口や水回りが1つだったり、お風呂がない物件もある

バランスよく小さい町にしていくビジョンも大事。ものづくりなどをするには、程よく開放していることが心地よいという意見も



今後の課題

- ・様々なまちづくりのグループがバラバラに活動している。連携を取っていきたい。
- ・若手で出店したい人はいるが物件がないので空き家を活用していきたい。
- ・昔のように大型店とも協力してまちの活性化をしていきたい。

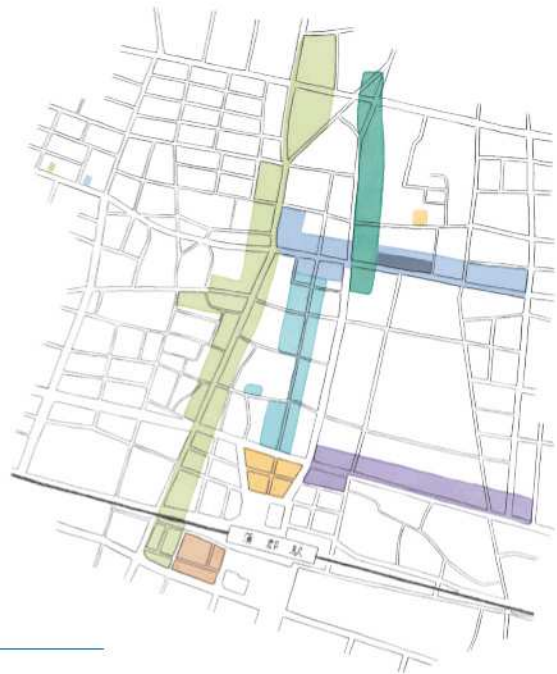
若手のパワーで祭り運営や事業継承・空き家対策などに取り組み、歴史をつなげていきたい。

蒲郡商店街



昭和39年、蒲郡商店街振興組合設立。蒲郡駅周辺の8つの発展会(中央通り、中通り、北駅前、南駅前、本町通り、銀座通り、神明・八百富駅前通り、駅前通り)で組織される商店街です。三河織物の中心地として古くから繊維産業が盛んな地域であり、国道23号線、JR・名鉄蒲郡駅に面していて利便性も高く、昭和50年代は特に大きな賑わいをみせました。

平成16年9月から、蒲郡市の中心市街地の活性化を目的とした「蒲郡TMO事業」の一環として、テント市やイベントを実施する「福寿稲荷ごりやく市」を開催。会場となる中央通りの約400mの区間が歩行者天国となり、蒲郡商店街および一般公募の出店者で約50店のカラフルなテントが立ち並び、現在も市内外から多くの人を訪れています。



- 中央通り発展会
- 銀座通り発展会
- 駅前通り発展会
- 駅北発展会
- 神明・八百富発展会
- 南駅前発展会
- 本町通り発展会
- 中通り発展会

蒲郡駅周辺8つの発展会でつくる商店街

>>武田さん

昔は蒲郡駅の北側に三河木綿の機屋(はたや)がたくさんあって、市内はもちろん、国鉄(現:JR)を使って幸田町や御津町からも多くの人を訪れました。近くで住み込みで働く女性の方もいて、お店では芸能人のプロマイドがよく売れたと母から聞いたことがあります。

>>小田さん

現在の形となる8つの発展会で組織される蒲郡商店街振興組合が発足したのが昭和39年。前年に「商店街振興組合法」が施行されたことがきっかけでした。最初、組合員の数はそれぞれの発展会に点々というだけで、250店ほどでした。そこから、商店街で働く人のための5階建ての立派な社宅もできて、昭和50年代から平成に入る頃までが一番賑わっていたんじゃないかな。

>>武田さん

あの頃は、発展会ごとに夏のお祭りをしていたのですが、どこもすごい賑いでしたよ。道幅いっぱい人があふれるほどでした。

>>小林さん

僕が子どもの頃、銀座通りのお祭りもごった返して動けないくらいでした。

>>武田さん

中央通りでは、中央フェスタというお祭りしている頃もありました。道路上にリングをつくってプロレスをしたり、町ごとに櫓(やぐら)もつくって。その時の若手の店主が中心となって、数えきれないほどのイベントを企画しました。社宅を振興組合が運営管理していて、その財源があったからできましたね。

>>小林さん

プロレス、すごく覚えています。僕は地元が近くで、商店街には日頃からトレカやゲーム、花火なんかを買いによく来てました。お年玉をもらったら商店街ってくらい、子どもたちにとっても欠かせない場所でした。

>>小田さん

いつからか、少しずつ商店街の元気もなくなってきて。今思い返すと、昭和50年代後半から平成にかけてスーパー「ヤオハン」や量販店「ジャスコ」があって、駅前の賑わいの拠点になっていたように思います。スーパーの帰りに商店街のお店に寄ってくれるお客さんも多かったし、お祭りにも積極的に協力してくれて。その2つが次々と廃業や移転してしまっただけでも大きかったですね。商店街衰退の要因の一つに大型店の進出があげられることもありますが、蒲郡商店街にとっては一緒にまちを盛り上げる仲間として、とても心強い存在でした。



ごりやく市が人とお店、お店とお店を結び後継者問題解決の糸口になれば
武田辰美さん
人形・ちょうちん・トレカのひな庄 店主
福寿稲荷ごりやく市 実行委員



まちの魅力を広く発信し、いつか蒲郡を丸ごと堪能できる観光スポットにしたい

小林拓矢さん
居酒屋ごすけ 代表



広浜正剛さん
居酒屋ごすけ 統括マネージャー
G-Walkersメンバー



新風を吹き込む若い世代が台頭してきてとても嬉しい
小田裕己さん
フルーツハウス オダ 店主
福寿稲荷ごりやく市 実行委員

これからは横のつながりを深めてモノや場所などを共有する仕組みづくりも必要
中島徹也さん
靴logi(くつろぎ) 店主
がまきたいっか メンバー



テント市を出会いの場に。縁を結ぶ「ごりやく市」

>>武田さん

各発展会でお祭りが縮小傾向になっていった頃だったかな。安心して歩ける商店街にしようと、平成15年に中央通りで6間道路と呼ばれた道を舗装し、バリアフリーにする「Rocken Road」というプロジェクトを実施しました。その時に老朽化していたアーケードも撤去しました。その翌年から始まったのが、今も続く「福寿稲荷ごりやく市」(以下、ごりやく市)です。会場の中央通り3~5丁目を歩行者天国にすることもあって、最初は反対の声も少なからずありましたね。ただ、軌道にのってくると、今度は雨で中止になったりすると残念がる声が聞こえるようになって。歩行者天国だから子どもたちも安心して遊べるし、今では定着して、毎回、多くの方楽しんでいただけるイベントになりました。

>>小田さん

「ごりやく市」は「食べる・買う・見る」のバランスを大切にしたいイベントで、その見どころの一つはテント市。一般公募で出店者を募るだけでなく、商店街のお店にも出店してもらっていて、初年度は60店舗中10数店舗が商店街からだったかな。知らないお店と出会ってもらい、日常で実店舗に行ってもらおうという狙いがありました。

>>武田さん

市内外からの出店者の中には、「今回、あのお店来てないの?」と聞かれるくらいリピーターを持つ人気店もあるんです。今、店主の高齢化や後継者に悩むお店も多いのですが、いつか軒先を借りるくらいでもいいので商店街でお店を構えてくれたら、未来が少し拓けるんじゃないかなと思っています。家族で後継ぎを見つけれたらいいのですが、それだけでは難しいので、後継者を探す一つの手立てとなればと期待しています。

>>小田さん

「ごりやく市」も実は一度、実行委員の高齢化を理由にやむなく開催の打ち切りを決めていたんです。でも、ちょうどその時、蒲郡を盛り上げようと熱心に活動する若者たちと出会って、その熱意に押される形で、一転継続が決まったという経緯があります。彼らは「昔のお祭りの賑わいを今の子どもたちにも味わってほしい」と話していて、こうして20年以上続けられているのは、彼らの強い想いと当時の商店街の人たちのがんばりがあったからこそだと感じています。



新たなステージへ、蒲郡商店街の挑戦は続く

>>中島さん

僕は9年前から駅前通りで、靴を中心とした革製品を製作販売しています。もともと蒲郡とは縁はなかったのですが、住んでみると駅は近いし、自然もあって、居心地がいい。イベントも週末になるとどこかしらでやっていて、訪れるきっかけがある場所だなと感じています。近年は特に新しい動きも多くて、僕も縁あって東港の整備をきっかけに立ち上がった、駅北商店街活性化チーム『がまきたいっか』の一員として活動しています。

>>広浜さん

僕は、中央通りの九州とり天と焼酎ハイボール「ごすけ」で統括マネージャーとして働く傍ら、蒲郡を中心としたイベント運営グループ『G-Walkers』に参加しています。令和6年11月には初のイベント「屋台村祭り」を開催しました。

>>小田さん

こうやって若い世代が出てきてくれていることは、とても嬉しいですね。「ごりやく市」も令和6年3月の運営を機に、ようやく世代交代することができました。ついに新しい風が吹き始めた。そんな雰囲気がしています。

>>武田さん

ただ、まだ店主の高齢化や後継ぎの問題は解決していませんし、空き家や空き店舗を貸したくても住まいになっていたり、水回りやトイレなどの設備が整ってなかったり、すぐに貸せない場所も多い。今後の課題です。

>>小林さん

蒲郡商店街でお店を出したいという若い人の声はよく聞きますし、空き家・空き店舗の活用にもっと注力でき

ば、可能性はまだまだ広がるように感じています。銀座通りの防火帯建築の佇まいも魅力的です。

>>小田さん

かつてのように、核となる大型店を誘致することができればもっと心強いですね。イベント日の集客だけでなく、一つのお店を拠点にして人の流れが生まれる仕組みがもう一度つくれたら。そして、肉も野菜も魚も生活用品も商店街に行けば揃う。そんな日常に寄りそえる商店街になればいいなと思っています。

>>小林さん

僕は歴史をつないでいきたいし、今ある魅力や地域資源を発信して多くの人に知ってもらいたいです。将来は、蒲郡商店街に行けば蒲郡を丸ごと堪能できる観光スポットの一つを目指したいとも考えています。

>>中島さん

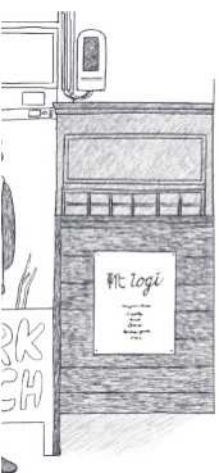
人口や子どもが減っていることもあり、縮小傾向になっていくことは致し方ないし、身の丈に合わせていくことも必要だと思います。ただ、そうした中でもやれることはたくさんある。たとえば、横のつながりを深めてモノや場所、時間を共有できれば、悩みどころであったお祭りの資材や行灯などをしまふ場所の解決の道筋にもなる。集客面でも運営面でもメリットは大きいはず。

>>広浜さん

そうですね。商店街振興組合のメンバーをはじめ、僕たち『G-Walkers』、駅北商店街活性化チーム『がまきたいっか』、他にも蒲郡商店街が大好きで熱意ある若者たちがたくさんいます。みんなで連携しながら、まち全体を盛り上げていきたいですね。



GAMMAGORISHHOTENGA



愛ある5つの商店街に出会って

2年目の活用モデル事例集、完成おめでとうございます。どのまちも歴史の蓄積があり、紡がれた魅力を持ちながらも、1980年代あたりから厳しい状況となり、2010年ごろにターニングポイントを迎えているところが興味深いな、と思いました。そんな私も、商店街に強く関わり出したのが2012年。岐阜市にある美殿町商店街と柳ヶ瀬商店街で仕事をし、商店街が暮らしの一部になっています。古く使われていない空間を探しては、ここがどうなると面白くなるかな、と思いをはせるのも楽しいし、まちの人たちと挨拶を交わしたり、馴染みの店に入ったりする顔の見える関係が心地いいです。生まれ育ちは田舎だったので、柳ヶ瀬商店街は買い物のためのまちでしたが、思い出がある場所、ある種の原風景と言える場所です。

この事例では、5つの商店街に「今までの原風景をつなぐ人」、「新しい原風景をつくる人」の二種類の方々がいて、役割分担と協働による温度のある商いが生まれていてワクワクしました。変化を受け入れる勇氣、私がこうありたいという能動的な活動は、次の世代にその風景を引き継ぐ力になると思います。私も誰かの原風景となるようなまちづくりの一部を担えたらと思って多様な事業に取り組んでいます。

社会が豊かに便利になる中で、まちが均質化に向かっていくと強く感じます。計画的に作られて、計画的に暮らすことがスタンダードになる中で、商店街はどう生き残っていくのでしょうか。私は、何かを期待して行きたくなる日常がある商店街になることだと思います。予期しない素敵な偶然が起こること。それは、異なる生き方をする「人」が集まることで可能になると考えます。まちへの愛がなくては持続しないことだとも思います。

「まちは新陳代謝するもの」という考えにとっても共感しています。5つの商店街の取り組みが進化していくことを楽しみすると共に、現場には事例集では語りきれないことがありそうなので、ぜひ商店街の皆さんに会いに行きたいです。

31



末永三樹 / 一級建築士

岐阜県生まれ。2012年に建築設計事務所ミュキデザインを設立し、デザインだけでなく、シェアオフィス、シェアハウスの運営や不動産事業も行う。2014年柳ヶ瀬商店街の定期市「サンデービルチングマーケット」を立ち上げ、2016年には「柳ヶ瀬を楽しいまちにする株式会社」を仲間たちと共同設立し、クリエイティブディレクターを務める。「あるものはいかそう、ないものはつくろう」を理念に、建築的な視点を持って「まちをアップデートし、次世代へ手渡す」ことを目指し、大小さまざまな設計、デザイン、企画・プロモーションなど包括的に考え実践する。一児の母。



柳ヶ瀬商店街

「商店街空き店舗活用モデル事例集」

発行／愛知県経済産業局中小企業部商業流通課

企画・編集・デザイン／株式会社ナゴノダナバンク

藤田まや、市原正人

安井加奈子、鈴木真理(テキスト編集)、安達麻未(MAP)

イラスト／parayu

写真(メイン、コラージュ)／岩田直和

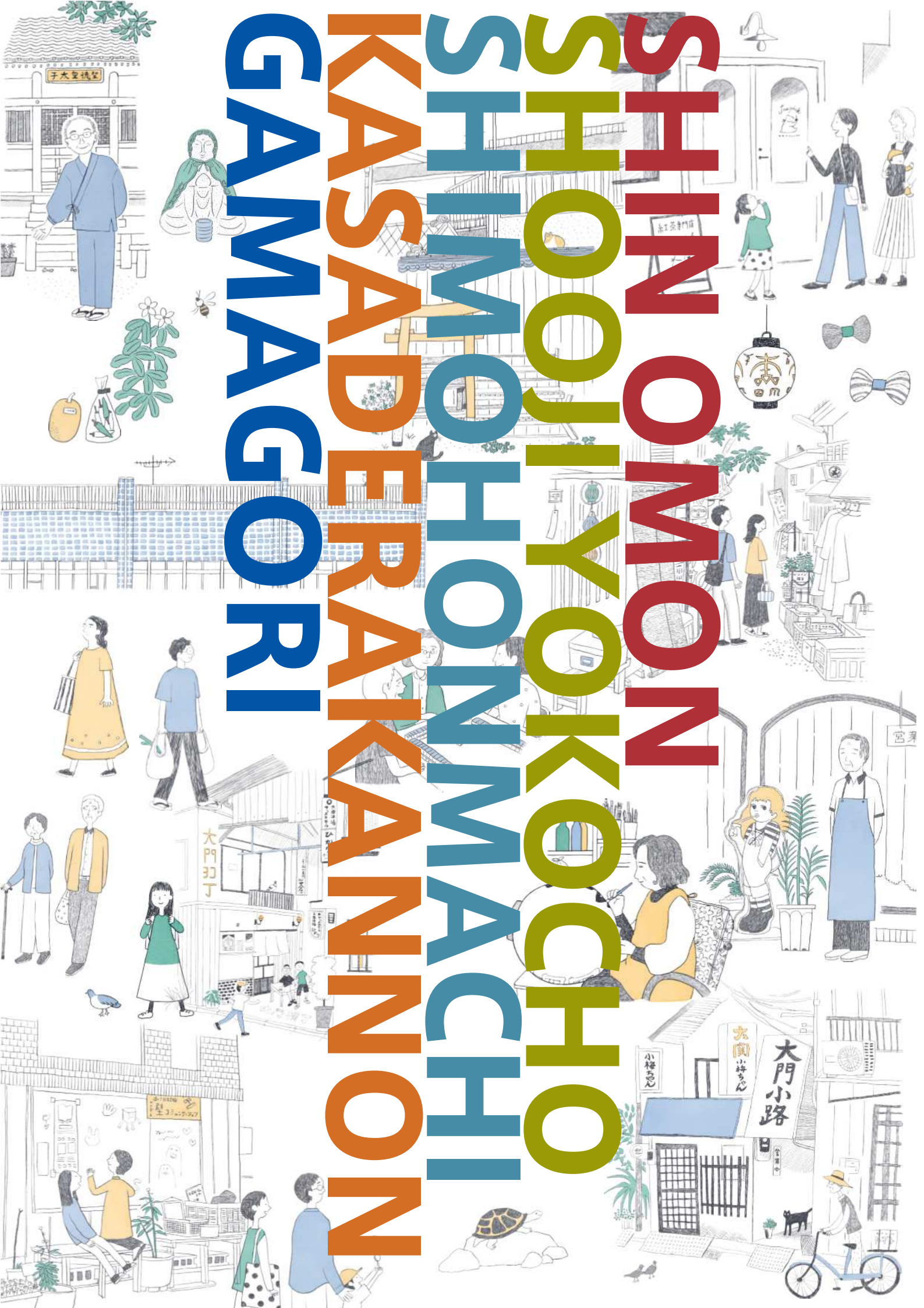
対談ライティング／CASE06-09 伊藤友季子、CASE10 鈴木真理

2025年2月発行

掲載情報は2025年2月時点のものです。



事例集は「愛知県商業流通課webページ」でもご覧いただけます



SHIN OMOMON
SHONOJIKOKOCHI
KASADERAIRAKAMON
GAMAGORI